

PROMOTING INDUSTRIAL DEVELOPMENT

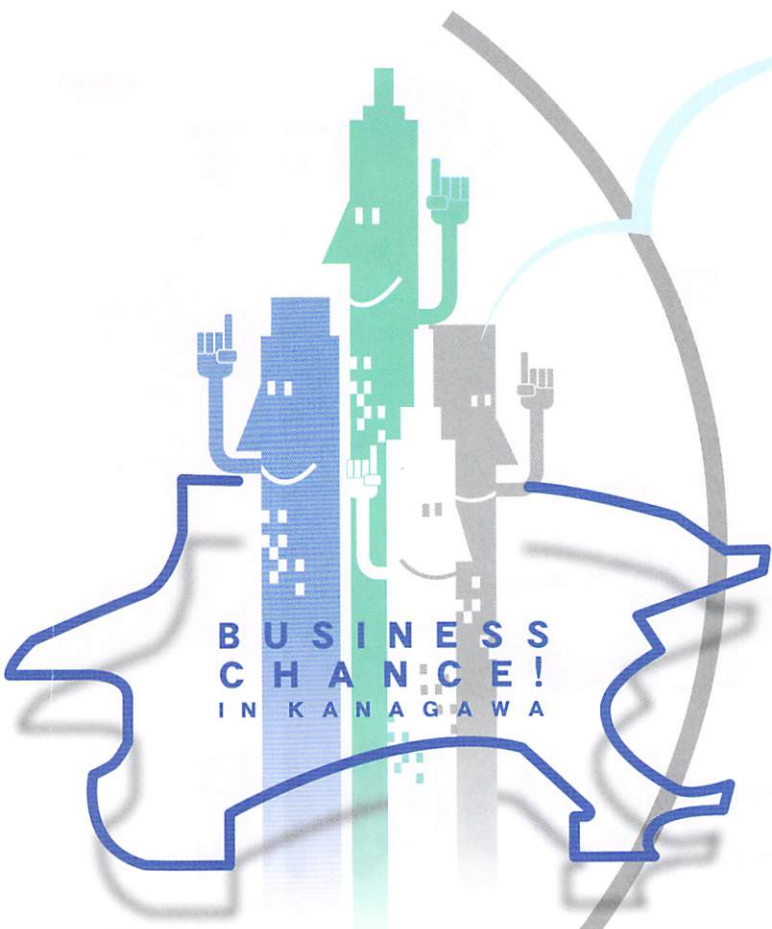
# BUSINESS LINE

## 特別号

発行 (一財)神奈川県経営者福祉振興財団

〒231-8525 横浜市中区元浜町4-32 ☎045-671-7101

<http://www.navida.ne.jp>



大賞 フロンティア部門

株式会社 ブルー・スターR&D

大賞 環境(エコ)部門

ナカノ 株式会社

優秀賞 フロンティア部門

アールテック 株式会社

優秀賞 環境(エコ)部門

株式会社 カタライズ

審査委員長賞 フロンティア部門

株式会社 ファブエース

奨励賞

株式会社 米専門店やまぐち

株式会社 紅谷

有限会社 スプリングアート

審査委員会賞

御菓子所 花ごろも

地域振興賞

有限会社 兼平実商店

福祉支援賞

株式会社 ガードアイ

かながわ

# 産業Navi大賞2015特集



2015  
増刊

ホーム > 2015受賞事業 > 福祉支援賞

大賞 フロンティア部門 株式会社ブルー・スターR&D

優秀賞 フロンティア部門 アールテック株式会社

審査委員長賞 フロンティア部門 株式会社ファブエース

奨励賞 株式会社 米専門店やまくち

奨励賞 有限会社スプリングアート

審査委員会賞 御菓子所 花ころも

福祉支援賞 株式会社ガードアイ

大賞 環境(エコ)部門 ナカノ株式会社

優秀賞 環境(エコ)部門 株式会社カタライズ

奨励賞 株式会社 紅谷

地域振興賞 有限会社 兼平実商店

## 福祉支援賞 株式会社 ガードアイ

代表取締役: 藤沢 雅憲

所在地: 〒222-0026 横浜市港北区篠原町2572-1-2-102

設立: 2005年10月 従業員: 6名

資本金: 5,000万円

TEL: 045-423-8550 / FAX: 045-530-7075

公式ページ: <http://guard-i.co.jp>

## 高齢者介護福祉施設向けデジタルセンサーの開発と販売

高齢者介護福祉施設におけるセンサー関連商品の市場は、右肩上がりであり伸びています。

デジタル式センサーを使って商品化することにより、低価格・小型化・長寿命・多機能化が実現でき、高齢者個々の挙動に合わせた動作を行わせることが可能となり、既存のアナログ式センサー商品には無い性能、付加価値を持たせられます。

さらに企画開発・生産・販売において、得意とする業務をそれぞれ専門的に受け持ち専念・連携するハブ株式会社経営を構築し、可能な限り住宅で行える雇用を創出することで生産コストの削減に繋がり、質の高い低価格な商品の提供を可能としました。

## 高齢者介護福祉施設向け デジタルセンサー



アイデアは理屈でなくモノにすること

“行く”ではなく“見守る”

「そもそも『電子ナースコール』という商品名で、商標登録もしてあるんですよ。でも、客先から“ガードアイを設置して”といった引き合いがあるので、パンフレットなどにも『ガードアイ・センサー』と案内するようになりました。嬉しいことですが」株式会社ガードアイ代表取締役・藤沢雅憲氏は満足げに語る。

メーカーで半導体の設計にかかわったのち独立、同社を設立した藤沢氏が扱おうと思ったのは防犯カメラだった。社名の由来は“愛”を“守る”である。「少しキザですけどね」と微笑んだ。



ところが始めてみると、マンションの屋外カメラを設置せよといった工事業者のようになってしまった。藤沢氏が行いたかったのは、独り暮らしが増える世相の中、警備会社によるホームセキュリティの“行く”ではなく、インターネットを活かした防犯カメラによる“見守る”というサービスだったのだ。



▲ このページの先頭へ

## 転倒事故防止のために

そうした中、営業先の介護施設で、こんな声を聞く。「私たちが知りたいのは、利用者さんがトイレに行くために部屋を出た時ではなく、布団から起き上がった時」

施設スタッフが最も手薄になる夜間帯は、高齢者のベッドからの転落やトイレに行く際の転倒による骨折事故が起きやすい。そこで安全向上のため、センサーの信号によりナースコールを鳴動させてスタッフに知らせる方策がとられている。

それまで施設に設置されているセンサーといえばマットセンサーを指すのが通例だった。ベッドの下に敷かれたマットの上に重みがかかる一つまり、足が着地すると、マットの中にあるスイッチが入り、有線によるナースコールで知ったスタッフが駆けつけるという仕組みだ。

だが、これではいちばん事故が起きやすいベッドを降りる時の介助に間に合わない。圧力によるアナログ式センサーは、ほかにベッドサイドや手すり、背中部分のシーツの下に敷くものがあるが、ベッドサイドに座るたびに検知したり、厚みがあって硬く、寝るのに快適でなかったりする。介助中はスイッチを切る必要があり、スイッチの戻し忘れによる事故も発生している。

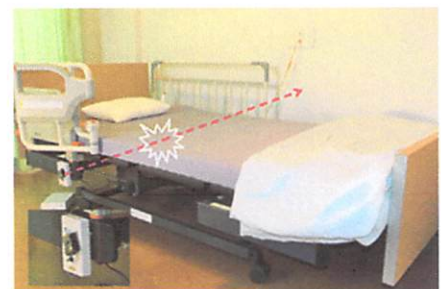


▲ このページの先頭へ

## ハブ株式会社経営

藤沢氏が発案したのは、利用者の足がベッドの横から出ると熱センサーで検知し、床に着く前にナースコールのスイッチが入るというシステムだった。回路部品を機械部品であるリレーで設計し、木箱に入れて販売した大型の第1世代から、半導体で回路設計することで徐々に小型化が進み、第4世代の現行モデルでは名刺サイズにまでなった。このため取り付けが楽になったほか、低価格な宅配便を利用できるようにもなっている。

また、第3世代より光ビームによる検知も採用している。熱センサーの場合、利用者が暑くてベッド上で布団をめくったりした際にも検知することがあった。より、施設スタッフの負担軽減と利用者の安全維持向上のため、光ビームを採用するに至った。最新モデルは光ビームのほかオプションで熱センサーも利用が可能だ。



もうひとつ今回受賞に至る評価対象となったのは、同社のユニークな業務形態である。それは、専門業務を在宅で行うハブ株式会社経営を構築していることだ。

まず本社となっているのが、藤沢氏の自宅である。ここが販売拠点であり、経理と試作を行う。藤沢氏の試作を受けてプリント基板の設計と回路の組み立てを行うのが、群馬県にいるスタッフだ。プリント基板は、このあと商社を通じて台湾の工場で量産される。製造されたプリント基板のチェックと、外装を含めた製品の組み立てを行うのは、群馬県在住のもう一人のスタッフである。

この二人は、藤沢氏の会社員時代の同僚であり、腹心の間柄である。

もともと埼玉県にあった事務所で行っていた作業を、コスト削減のためにそれぞれの自宅で行うようにした。契機は、藤沢氏の二人のお嬢さんが結婚、就職などで独立し、自宅に空き部屋ができたからだ。「この時を待っていたんですよ」と豪快に笑い飛ばす藤沢氏の言葉は寂しさの裏返しかもしれないが、同社のハブ経営が軌道に乗っているのは確かだ。

「アイデアは理屈ではなくモノです。これからもナンバーワンでなくてもいいからオンリーワンの商品を生み出していきたい」と藤沢氏は先を見つめる。

[▲ このページの先頭へ](#)

[▲ ページトップ](#)



かながわの皆さまを支える  
**福祉振興財団**

[福祉振興財団ホーム](#) | [産業Naviホーム](#) | [個人情報の取扱いについて](#) | [プライバシーポリシー](#)

Copyright© 2015. Navida.ne.jp All Rights Reserved.